季刊 文化経済学会

No.94
Vol. 25 No.1
2016.6.1
ISSN 0918-3787

Japan Association for Cultural Economics

オリンピック文化プログラムと文化・芸術振興の専門組織

静岡県文化・観光部文化政策課
岩瀬 智久

静岡県における文化振興の目的や施策展開の方針等を明らかにし、文化振興施策を総合的、効果的に推進するためにまとめられた「第３期ふじのくに文化振興基本計画（2014～2017）」は、「みる」:文化振興の基盤・人づくり、「つくる」:魅力ある文化の創造と発信、「ささえる」: 文化を発展させる体制づくり、という３つの要素を軸として構成されている。このうち、主に「つくる」「ささえる」に関係する具体的な取組みの一つとして「静岡県版アーツカウンシル設置に向けた検討」が掲げられており、この計画策定に携わった静岡県文化政策審議会の委員や、静岡県文化・観光部等の関係者間において、文化・芸術振興のための専門組織の必要性は認識されていた。

その背景としては次のことが考えられる。第一に、文化・芸術活動に対して自治体が実施する助成等とその対象事業の内容について的確な判断を下せる人材を、行政組織において確保することが非常に困難であること。第二に、本来ならば地域の文化・芸術振興の機能を担うべき多くの地域文化振興財団が、文化施設の指定管理者としての業務を主とせざるを得ない状況にあり、専門的スタッフも不足していること。第三に、それらの結果、各種の文化振興施策によって蓄積された経験や調査研究に基づく新たな事業展開や施策提案が行われないこと、である。そのため、自治体や自治体が基本財産の大部分を出捐する地域文化振興財団による助成が効果的に行われているのかどうかの検証が十分に為されないまま助成が継続される、といった課題が生じてきていた。このような状況を改善するため、文化・芸術振興の専門組織の必要性が認識され、比較的情報が豊富だった英国の事例をもとに、アーツカウンシル設置の検討が掲げられた。

しかしながら、財源難に悩む多くの地方自治体にとって、新たな組織を設置することは非常に困難であり、また、仮に組織を設置することができたとしても、具体的に何らかの事業を担うことでしか、専門組織は経験を蓄積し、機能するようにはならない。そのような状況にあって、2020年東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムへの取組みが、専門組織を実現していく上で格好の機会となったのである。

平成26年11月の「全国知事会2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会推進本部会議」における川勝平太静岡県知事の発言を踏まえ、会議の決議文に「2020年に向け、全国各地から地域固有の文化発信が活発に行われるべきである」との文言が盛り込まれた。この動きを受け、静岡県では2020年オリンピック・パラリンピック文化プログラムに向けた取組みが始まり、平成27年10月にはプログラム推進のための準備委員会が設置され、今年５月には推進委員会へと組織を改めた。両委員会には、文化・芸術分野や観光分野等の専門家で構成される専門委員会が置かれ、プログラム推進の基本方針や体制等について検討を重ねてきた。

その結果、静岡県では文化プログラムの推進に当たり、大規模で一極集中的なアートイベントではなく、県内各地の多様な文化資源を芽として、文化・芸術による地域的・社会的課題への対応を視野に入れたプログラムを進めていく方法を採ることとした。そのためには、プログラムの担い手やプログラムへの参画を希望する人々に対して助言や支援を行う実践的専門家が必要であることから、専門委員会のもとにプログラム・コーディネーター（先行事例のプログラム・ディレクターに相当するものと考えられる）や専門スタッフ（同様にプログラム・オフィサーに相当）を置くこととし、今年度から人材確保に取り組み始めている。また、今年の夏からはモデルプログラムを公募・実施することで、これらの専門家が実際にプログラムの担い手に伴走しながら経験を蓄積していくことができると考えている。

幸い、この取組みは文化庁の「文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業」において平成28年度に開始された「地域における文化施策推進体制構築促進事業」に採択されるところとなり、原則として３年間継続して事業費の

２分の１以内の補助を受けられることとなった。文化プログラムの推進に伴い、29 年度以降は専門家の配置等を更に充実させていく必要があると考えている。文化プログラム推進のための組織の設置や専門家の配置が、アーツカウンシルのような文化・芸術振興のための専門組織の母体となっていくことが期待される。

取組みが始まったとはいえ、人材の確保や雇用条件の整備、専門組織としての機能確保等についての様々な課題が想定される。何よりも静岡県という地域において必要不可欠な存在となるだけの実績を残すことができるかどうかが問われることになる。また、2020 年以降にどのような形で組織を存続させるのかも、大きな課題である。これらは、静岡県という地方自治体において文化政策をどのように進めていくのか、という更に大きな課題とリンクしており、専門組織の構築は、政策推進上のターニングポイントとなることが予想される。

アーツカウンシル的な専門組織の必要性に対する認識の背景は、地域ごとにそれぞれ異なるはずであり、組織の在り方も多様であるべきである。時代のトレンドとしてではなく、地域の特性や事情によって様々な形の専門組織が構築されていくことが望ましい。静岡県の試みは、そのひとつの事例に過ぎないが、特別な存在ではない一地方自治体の文化政策の在り様を問う好機であると考えている。

NEWS for Cultural Economics

2016 年
7 月 1・2・3 日
（金・土・日）

2016 年度研究大会は，大阪樟蔭女子大学（大阪府東大阪市）にて開催

大会テーマは「文化資源の活用による地域再生 －その成果と検証－」

2016 年度研究大会の概要が決まりましたのでご案内いたします。2016 年 7 月 2 日（土）、3 日（日）の 2 日間にわたり、大阪府東大阪市にある大阪樟蔭女子大学にて開催いたします。

■日程：2016 年 7 月 1 日 (金)・2 日 (土)・3 日 (日)　※ 1 日はエクスカーション

◎7 月 1 日（金）（大阪市、東大阪市）

15:00～18:30	エクスカーション　コース 1 大阪アートクルーズ ◆「ゲストハウスとカフェと庭 ココルーム」・アトリエコーナス
13:00～17:00	エクスカーション　コース 2 東大阪モノづくり企業ツアー ◆松尾捺染（株）他東大阪の製造業数社

◎7 月 2 日（土）会場：大阪樟蔭女子大学芳情館（4 号棟 A）・清志館・翔空館

9:00～	受付開始（芳情館 1 階北ロビー）
10:00～11:45	分科会① ①-A　文化施設（芳情館 5F 528 教室） ①-B　クラシック音楽への新しいアプローチ（芳情館 5F 522 教室） ①-C　スポーツ・メディア・インターネット（芳情館 5F 521 教室） ①-D　まちづくり・地域再生（芳情館 4F 429 教室）
11:45～13:00	昼食、理事会（11:50-12:50）
13:00～15:00	**特別セッション 1**　（芳情館 5F 528 教室） **「スポーツが文化や経済、社会にどのような役割を担いうるのか」** **【趣旨】** 地域社会の価値を創造し、住民の幸福感を向上させるための仕組み作りを考えてい

13:00～15:00	ったときに、文化とスポーツの果たすべき役割は大きいと考えられる。しかしながら、公的な財政負担を期待できない状況において、民間資金を活用したシステムの構築を模索する重要性は高まっている。 　本セッションでは、スポーツと文化を融合し、民間資金を基本とした新しいコミュニティ形成を行っている例を用いて、上記の課題を議論していく。 **基調講演** 　池永 寛明（大阪ガス理事　エネルギー・文化研究所長） 　「世界でいちばん住みたいまちを目指して―スポーツ・文化・食による新たなコミュニティ形成―ある人口減少の都市での新たな学び」 　朝原 宣治（大阪ガス） 　「スポーツの活用に関する先端的試み－アスリートネットワークの取り組み－」 **パネルディスカッション** **【パネリスト】** 　八木　匡（同志社大学）「創造経済とスポーツ」：キーノートレクチャー 　伊多波良雄（同志社大学）「スポーツと幸福感」：キーノートレクチャー 　朝原 宣治、池永 寛明 **【コーディネーター】**横山 勝彦（同志社大学）
	特別セッション２　（芳情館 5F 522 教室） **「地域アーツカウンシルの現状と展望」** **【趣旨】** 　「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第３次、第４次）」を受け、国のアーツカウンシル（独立行政法人日本芸術文化振興会）では、文化芸術への支援について機能や体制が強化されている。 　それと前後して、横浜市、沖縄県、東京都、大阪府・市でもアーツカウンシルが設置されてきた。今年１月には、東京 2020 大会の文化プログラムの実施も視野に入れて地域アーツカウンシルの設置を促す「地域における文化施策推進体制の構築促進事業（文化庁）」が公募され、採択団体（横浜市、新潟市、静岡県、大阪府、大分県）が決定した。 　本セッションでは、これら地域アーツカウンシルが一堂に会し、それぞれの現状や課題、計画を共有し、あるべき姿や今後の役割、機能などについてディスカッションを行う。 **【パネリスト】** 　岩瀬 智久　静岡県文化・観光部 文化政策課 専門監 　佐藤 千晴　大阪府市文化振興会議 アーツカウンシル部会（大阪アーツカウンシル）統括責任者 　杉浦 幹男　（公財）沖縄県文化振興会 文化芸術推進課 　　（沖縄版アーツカウンシル）　前プログラム・ディレクター 　高田　聡　横浜市文化観光局 文化芸術創造都市推進部 創造都市推進課担当係長 　堀　政博　大分県企画振興部芸術文化スポーツ局 芸術文化振興課 主査 　三好 勝則　（公財）東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 機構長 　山口 誠二　新潟市文化スポーツ部長 **【モデレーター】**吉本 光宏（株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事）

15:25～17:40	**シンポジウム**（清志館 5F G501 多目的教室） **「文化資源を活用した都市・地域再生：アウトカム・インパクトを検証する」** **【趣旨】** 行政・民間を問わず、地域活性化・地域課題解決のために潜在的な文化資源を活用していくことが各地で行われるようになった。それらの取り組みは、都市・地域の活性化にどのように結びついているのか。そこで、本シンポジウムでは、地域バランスや人口規模を勘案しつつ、歴史的建造物、古民家、まちづくり、食文化、炭鉱遺産等文化資源を活用した全国各地の代表的かつ先進的な事業・プロジェクトを取り上げる。そして、それらの効果、特にアウトカム、インパクトに焦点を当て、実践上、研究上双方の課題・今後の方向性を検討したい。 **【事業・プロジェクト／パネリスト】** あいちトリエンナーレ／大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授　吉田 隆之 一般社団法人 NOTE の古民家再生／一般社団法人 NOTE 代表理事　金野 幸雄 そらち産炭地域活性化戦略／NPO 法人炭鉱の記憶遺産推進事業団理事長、 札幌国際大学観光学部教授　吉岡 宏高 食文化創造都市・鶴岡／三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング主席研究員　太下 義之 **【モデレーター】** 鳥取大学地域学部教授　野田 邦弘
17:40～18:00	移動
18:00～20:00	懇親会（会場：翔空館 10F S1001 多目的教室）

◎7 月 3 日（日）会場：大阪樟蔭女子大学芳情館（4 号棟 A）

9:00～	受付開始（芳情館 1 階北ロビー）
10:00～11:45	分科会② ②-A　観光・文化遺産（芳情館 5F 528 教室） ②-B　文化支援（芳情館 5F 522 教室） ②-C　固有価値と文化資本（芳情館 5F 521 教室） ②-D　創造都市（芳情館 4F 429 教室）
11:45～12:45	昼食
12:45～13:15	総会（芳情館 5F 528 教室）
13:20～14:00	新会長講演（芳情館 5F 528 教室）
14:10～16:30	分科会③ ③-A　文化統計・計量分析（芳情館 5F 528 教室） ③-B　文化政策（芳情館 5F 522 教室） ③-C　アートプロジェクト（芳情館 5F 521 教室） ③-D　アジアにおける文化政策と文化交流（芳情館 4F 429 教室）

■会場

大阪樟蔭女子大学芳情館（4 号棟 A）・清志館（2 日のみ）・翔空館（2 日のみ）。

会場となる校舎は３つに分かれています。分科会と特別セッションは芳情館（4 号棟 A）、シンポジウムは清志館、懇親会は翔空館が会場になります。同じキャンパス内ですので、校舎間の平面移動にはそれほど時間を要しませんが、シンポジウム会場（清志館 5F）、懇親会会場（翔空館 10F）へのエレベータの台数が限られておりますので移動時間にご注意ください。

■大阪樟蔭女子大学へのアクセス

大阪樟蔭女子大学は、近畿日本鉄道（近鉄）奈良線河内小阪駅または河内永和駅（JR おおさか東線 JR 河内永和駅に隣接）下車で、徒歩 4 ～ 5 分のところにあります。なお、2 日（土）は近鉄奈良線に接した北門から大学構内に入れますが、3 日（日）は東側の正門からのみの入・退場となりますのでご注意ください。

■宿泊等について

宿泊につきましては、特にこちらからご案内をしておりません。前回のニューズレターにも記させていただきましたが、最寄り駅となる河内小阪駅・河内永和駅（JR 河内永和駅）の両駅には近鉄難波駅から 15 分程度、近鉄奈良駅から 40 分程度で到着します。難波周辺だけでなく奈良駅周辺のホテルも宿泊先の候補になるかと思います。また、大阪のホテルは予約がきわめて取りにくい状況が続いているようです。大学近隣のビジネスホテルも同様ですので、早めの確保あるいは場所の選択の幅を広げて当たられることをおすすめしたいと思います。

大阪樟蔭女子大学へのアクセスの詳細、会場配置については 7P の案内図をご覧ください。また、交通機関の利用に際しては乗換案内の各種サイトを参照ください。

■参加費等

・参加費　事前申し込み

会員 2000 円、非会員 4000 円

学部生 2000 円（学生証をお持ち下さい）

・参加費　当日受付

会員 3000 円、非会員 5000 円

学部生 2000 円（学生証をお持ち下さい）

※ 前年度会費未納の会員は、事前申し込みは不可。当日受付のみで参加費は 4000 円

・懇親会費　5000 円

（大阪樟蔭女子大学翔空館 10F　S1001 多目的教室）

・大会昼食ならびに昼食弁当　1 食 1000 円（7/3(日) のみ、飲み物付　事前申し込みが必要です）

なお、7 月 2 日 (土) につきましては、大阪樟蔭女子大学学生食堂 (高智館 1 階) を利用することができますのでご利用ください。また、河内小阪駅近辺の昼食可能な場所については学会当日に簡単な資料を皆様に配布する予定です。そちらもご参照ください。

・参加費、懇親会費、昼食弁当代は、別途郵送した案内に同封している郵便振替の払込用紙にてご送金ください。

・エクスカーションは事前申込みが必要となります（以下をご参照下さい）。参加費は現地でお支払下さい。

■エクスカーション

1 日（金）のエクスカーションでは、大阪南部阿倍野・天王寺界隈にあるオルタナティブな二カ所のアートスポットにご案内するコース 1 と東大阪地域に集積するオンリーワンのモノづくり企業を巡るコース 2 の二つのコースを用意しています。

エクスカーション　コース1「大阪アートクルーズ」

【概要】大阪南部阿倍野･天王寺界隈にあるオルタナティブな二カ所のアートスポットにご案内します。

訪問先：「アトリエコーナス（Atelier CORNERS）」
http://corners-net.com/about/
「ゲストハウスとカフェと庭 ココルーム」
http://cocoroom.org

コーディネーター：川井田祥子（同志社大学）

【スケジュール】

2016年7月1日（金）

15:00 大阪市営地下鉄谷町線 阿倍野駅 南改札口 集合
（徒歩移動）

15:10-15:30　アトリエコーナス見学
建物外観・室内・利用者の様子など見学

15:30-16:30　アトリエコーナス北館2階（和室）
白岩さんのお話（約30分）
＊お話の後、クッキーなどの購入も（各自）
（徒歩移動）

17:00-18:30　ココルーム　上田さんのお話
（約30分）＋見学
＊カフェでお茶も（各自注文）

18:30　解散、希望者はそのままココルームで交流会

＊ココルームの最寄駅は、地下鉄御堂筋線「動物園前」駅 or JR「新今宮」駅で、いずれも徒歩10分

【定員】10～15名（申込み先着順）

【参加費（予定）】 1000円
＊訪問先2ヵ所へのお礼に充当
＊現地でのお茶代や交流会の参加費は別途負担

エクスカーション　コース2「東大阪モノづくり企業ツアー」

【概要】東大阪地域にあるモノづくりの事業所をマイクロバス（または徒歩）で巡ります。

コーディネーター：鈴木大輔
（一般社団法人 WORLD ART DIALOGUE）

【スケジュール】

2016年7月1日（金）

13:00　JRおおさか東線　高井田中央駅（大阪市営地下鉄中央線 高田駅隣接）改札口 集合
（徒歩またはマイクロバスで移動）

訪問先企業：
松尾捺染（株）http://www.matsuo-nassen.co.jp
（株）アオキ http://www.aoki-maido.co.jp、 他1-2社
＊訪問先は現在折衝中ですので変更の可能性があります。
＊詳細なスケジュールは学会WEBサイトに掲載を予定しています。

17:00　高井田中央駅 改札口 解散
＊解散後、高井田近辺で軽く懇親会を予定しております（希望者のみ、参加費別途）

【定員】10～15名（申込み先着順）

【参加費（予定）】1000円
＊マイクロバス代・訪問先へのお礼に充当

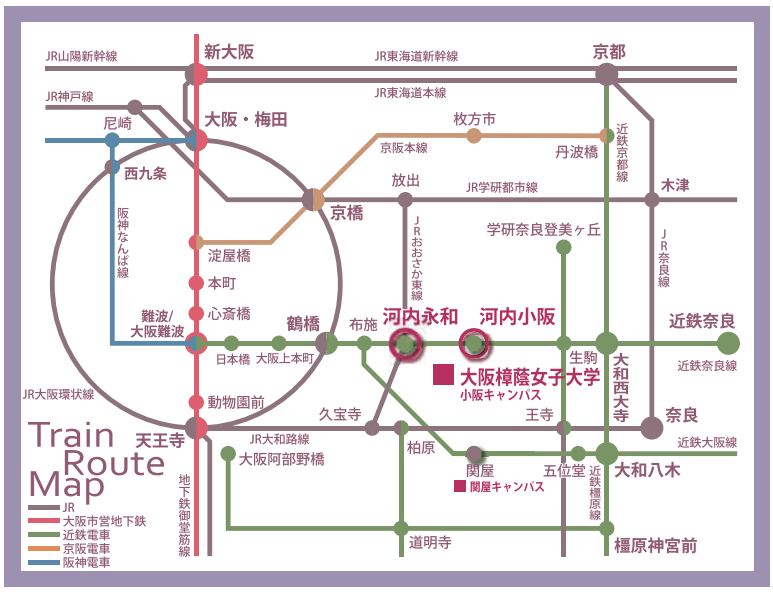
●申込方法：オンラインでの大会参加の申し込みと同時に、ご希望のコース（コース１・２）にチェックを入れてお申込みください。なお、エクスカーションの参加費だけは当日、現地でお支払いください。
●募集定員：両コースとも10～15名を目安としています。
※キャンセルの場合は、当日連絡先（参加者に連絡します）までご連絡下さい。
※申込み多数の場合ご参加いただけない場合がありますので、お早めにお申込み下さい。
●問合わせ先：現地事務局　萩原　雅也（大阪樟蔭女子大学）
携帯：090-1101-6909　大学代表：06-6723-8181　Mail：hagihara.masaya@osaka-shoin.ac.jp

Traffic & Access

Osaka Shoin Women's University

[大阪樟蔭女子大学への交通・アクセス]

■電車でお越しの方　Train Route Map



■キャンパス 近隣マップ　Campus Access Map

大阪樟蔭女子大学への交通・アクセス

●大阪方面 から

◎［JR大阪環状線］大阪駅→鶴橋駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（３０分）
◎［地下鉄御堂筋線］梅田駅→大阪難波駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（３０分）
◎［JR東西線］北新地駅→放出駅［おおさか東線］→ＪＲ河内永和駅（２０分）

●難波方面から

◎［近鉄奈良線］大阪難波駅（準急）→河内小阪駅（１５分）

●天王寺方面から

◎［JR大阪環状線］天王寺駅→鶴橋駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（２０分）

●神戸方面 から

◎［JR神戸線］三ノ宮駅（新快速）→大阪駅［JR大阪環状線］→鶴橋駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（５５分）
◎［JR神戸線］三ノ宮駅（新快速）→放出駅［おおさか東線］→ＪＲ河内永和駅（５０分）
◎［阪神本線］三宮駅（快速急行）→鶴橋駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（５０分）

●京都方面 から

◎［JR京都線］京都駅（新快速）→大阪駅［JR大阪環状線］→鶴橋駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（６０分）
◎［近鉄京都線］京都駅（急行）→大和西大寺駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（８０分）

●奈良方面 から

◎［近鉄奈良線］近鉄奈良駅（準急）→河内小阪駅（４０分）

●王寺方面 から

◎［ＪＲ大和路線］王寺駅（快速）→久宝寺駅［おおさか東線］→ＪＲ河内永和駅（３０分）

●名張方面から

◎［近鉄大阪線］名張駅（急行）→布施駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（７０分）

●和歌山方面から

◎［JR阪和線］和歌山駅（快速）→天王寺駅［JR大阪環状線］→鶴橋駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（８５分）
◎［南海本線］和歌山市駅（特急）→大阪難波駅［近鉄奈良線］（準急）→河内小阪駅（８０分）

近鉄奈良線「河内小阪駅」下車　西へ徒歩４分（300m）
JRおおさか東線「JR河内永和駅」下車　東へ徒歩５分（400m）

学校法人　樟蔭学園
大阪樟蔭女子大学
小阪キャンパス　〒577-8550 東大阪市菱屋西4-2-26　TEL. 06-6723-8181（代表）
http://www.osaka-shoin.ac.jp

文化経済学会<日本> 2016年度研究大会分科会 プログラム

分科会① 7月2日（土） 10:00～11:45

①-A 文化施設

座長 本杉 省三（日本大学）

論題	都道府県の文化財団等が管理・運営している空間による事業の傾向
発表者	林 宰寛（名古屋大学大学院）
討論者	本杉 省三（日本大学）

論題	劇場・音楽堂の管理運営計画の検討過程における住民参加 ―埼玉県富士見市民文化会館開館までを対象に―
発表者	堀本 暁洋（東京大学大学院）
討論者	宮崎 刀史紀（（公財）京都市音楽芸術文化振興財団）

論題	劇場は地域社会に何をもたらすのか～地域劇場のサイレント・パトロン形成に関する考察
発表者	五島 朋子（鳥取大学）
討論者	宮崎 刀史紀（（公財）京都市音楽芸術文化振興財団）

①-B クラシック音楽への新しいアプローチ

座長 藤野 一夫（神戸大学）

論題	公益財団法人大田区文化振興協会の「クラシックモニター制度」の取り組みについて
発表者	宮地 宏征（横浜市立大学大学院）
討論者	熊倉 純子（東京藝術大学）

論題	クラシック音楽には近視眼的思考を緩和する効果があるか？一経済実験と集計データによる音楽の嗜好と時間選好率およびリスク許容度との相関分析一
発表者	保原 伸弘（東京福祉大学）
討論者	牧 和生（青山学院大学）

論題	鑑賞頻度を楽団間で比較してよいか：首都圏在住者への定量分析
発表者	涌田 龍治（京都産業大学）
討論者	熊倉 純子（東京藝術大学）

①-C スポーツ・メディア・インターネット

座長 有馬 昌宏（兵庫県立大学）

論題	Why Should She Play "Narikiri"? : Cooperative Creation in Virtual Communities and the Role of Social Capital（英語発表）
発表者	梅本 克（デジタルハリウッド大学）
討論者	八木 匡（同志社大学）

論題	スポーツ放送をめぐる政策分析～NHK(日本放送協会)を事例に～
発表者	小林 塁（同志社大学大学院）
共同発表者	横山 勝彦（同志社大学）
討論者	増淵 敏之（法政大学）

論題	「協働」型社会を構築するスポーツ組織―総合型地域スポーツクラブを事例に―
発表者	米村 真悟（同志社大学大学院）
共同発表者	横山 勝彦（同志社大学）
討論者	増淵 敏之（法政大学）

①-D　まちづくり・地域再生

座長	伊藤 裕夫

論題	天草における文化資源としての下浦石工を活かした地域再生への挑戦的試行～天草・下浦フィールドワークが炙り出す地域再生へのシナリオ創出と実践～
発表者	藤原 惠洋（九州大学）
討論者	清水 裕之（名古屋大学）

論題	陶磁器産地波佐見のまちづくり
発表者	古河 幹夫（長崎県立大学）
討論者	清水 裕之（名古屋大学）

論題	ジェントリフィケーションの文脈におけるプレイヤーの変化 ～2000年代後半以降の札幌の事例から～
発表者	加藤 康子（北海道大学大学院）
討論者	伊藤 裕夫

分科会②　7月3日（日）　10:00～11:45　*A会場のみ終了予定時刻が異なります

②-A　観光・文化遺産

座長	佐々木 亨（北海道大学）

論題	全国の本山寺院における伽藍・森林の管理の現状と意向
発表者	峰尾 恵人（京都大学大学院）
討論者	澤村 明（新潟大学）

論題	「はんなり」世界の破壊―京都祇園甲部の観光問題を中心に―
発表者	中原 逸郎（京都楓錦会 ）
討論者	澤村 明（新潟大学）

②-B　文化支援

座長	小林 真理（東京大学）

論題	非営利文化芸術団体とソーシャル・ファイナンス　－資金調達手段としてのソーシャル・インパクト・ボンド導入可能性の検討－
発表者	佐藤 敦子（明海大学）
共同発表者	森 利博（立命館大学大学院）
討論者	綿江 彰禅（野村総合研究所）

論題	沖縄版アーツカウンシル事業の取り組みと評価～わが国における地域アーツカウンシルの課題～
発表者	杉浦 幹男（（公財）沖縄県文化振興会）
討論者	太下 義之（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング（株））

論題	変化する文化支援の論理―クリエイティブ産業の税制インセンティブを中心に―
発表者	後藤 和子（摂南大学）
討論者	太下 義之（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング（株））

②-C 固有価値と文化資本

座長 佐々木 雅幸（同志社大学）

論題 地域創造と歴史的文化資源の活用—市民、専門的人材、自治体の協働と文化資本の持続的蓄積に向けて
発表者 本田 洋一（大阪市立大学）
討論者 後藤 和子（摂南大学）

論題 固有価値論から見る災害の記憶化とレジリエンス
発表者 橘高 彫斗（大阪大学大学院）
討論者 藤野 一夫（神戸大学）

論題 日本経済学における文化資本概念の成立－経済資本概念との対比を中心として
発表者 池上 惇（市民大学院）
討論者 伊藤 裕夫

②-D 創造都市

座長 萩原 雅也（大阪樟蔭女子大学）

論題 創造の場における場所性の構築
発表者 金 泰勳（大阪市立大学大学院）
討論者 野田 邦弘（鳥取大学）

論題 芸術分野における「社会（的）包摂」に関する状況整理とその再検討
発表者 長津 結一郎（九州大学）
討論者 川井田 祥子（同志社大学）

論題 欧州文化首都と東アジア文化都市～東アジア文化都市の果たすべき役割とは何か
発表者 野田 邦弘（鳥取大学）
討論者 川井田 祥子（同志社大学）

分科会③ 7月3日（日） 14:10～16:30

③-A 文化統計・計量分析

座長 勝浦 正樹（名城大学）

論題 観光における地域統計の新たなアプローチ
発表者 山本 史門（野村総合研究所）
討論者 井口 貢（同志社大学）

論題 社会生活基本調査を用いた男女別文化需要のコーホート分析
発表者 新谷 正彦（西南学院大学）
共同発表者 勝浦 正樹（名城大学）
討論者 周防 節雄（兵庫県立大学）

論題 How Has Limited Government Changed the Management of the Japanese Prefectural Museums Since 2006?
発表者 谷口 みゆき（慶應義塾大学）
討論者 佐々木 亨（北海道大学）

論題 学生の文化・芸術に対する意識の現状と変化
発表者 有馬 昌宏（兵庫県立大学）
討論者 佐々木 亨（北海道大学）

③-B 文化政策

座長 河島 伸子（同志社大学）

論題	芸術家・クリエーターの労働市場と労働政策・社会保障政策
発表者	稲熊 太郎（同志社大学大学院）
討論者	牧 和生（青山学院大学）

論題	文化活動家たちの地域文化政策においての懸案認識に関する基礎的な研究：Q方法論を用いた考察
発表者	柳 永珍（韓国釜山大学）
討論者	田中 鮎夢（中央大学）

論題	陶芸作家のキャリア形成における芸術教育と文化政策との相互性―持続可能性を担う地域固有の創造環境とグローバル化―
発表者	前田 厚子（同志社大学大学院）
討論者	阪本 崇（京都橘大学）

論題	自治体が公開する文化情報資源の二次利用に関する考察
発表者	佐藤 忠文（九州大学大学院）
討論者	阪本 崇（京都橘大学）

③-C アートプロジェクト

座長 熊倉 純子（東京藝術大学）

論題	アートプロジェクトにおけるボランティアの役割
発表者	三宅 美緒（北海道大学大学院）
討論者	藤原 惠洋（九州大学）

論題	地域活性化事業におけるアート実践の諸課題について 大地の芸術祭2015十日町中心市街地アートプロジェクトを事例に
発表者	山口 祥平（首都大学東京）
討論者	藤原 惠洋（九州大学）

論題	芸術家と地域社会の共創に関する研究 ーソーシャル・ランドスケープ基金の活動からー
発表者	谷口 文保（神戸芸術工科大学）
討論者	友岡 邦之（高崎経済大学）

論題	旧産炭地におけるアートプロジェクトの分析と評価に関する研究
発表者	國盛 麻衣佳（福岡女学院大学）
討論者	友岡 邦之（高崎経済大学）

③-D アジアにおける文化政策と文化交流

座長	川崎 賢一（駒沢大学）

論題	韓国における言語政策
発表者	金 ボラ（京都大学大学院）
討論者	吉本 光宏（（株）ニッセイ基礎研究所）

論題	日本のキャラブランド・パワーの考察―日本における中国人留学生を例として
発表者	簡 逸威（慶応義塾大学大学院）
討論者	後藤 和子（摂南大学）

論題	ラオスの経済発展と日本の文化と技術移転～ラオスと大川の家具産業を中心に～
発表者	松下 愛（久留米大学）
討論者	後藤 和子（摂南大学）

論題	シンガポールのコミュニティはアートによって開かれるのか―芸術家へのインタビュー調査を基に―
発表者	南田 明美（神戸大学大学院）
討論者	川崎 賢一（駒沢大学）

2016年度秋の講演会は、日本大学（東京都千代田区）で開催されます

2016年
10月29日
（土）

2016年度秋の講演会 開催日程等のご案内

テーマ：「公立文化施設が目指す目標と実態の狭間」

公立文化施設（劇場・ホール等）が掲げている基本方針とその実態にはギャップがあると言われています。文化振興に関する条例を策定している自治体は少なく、自治体内部の理解も乏しいことから、人材・組織・体制に課題を抱えていることが、これまでの調査からも指摘されています。

芸術監督やプロデューサーの登用、施設の専門化・高度化、練習機能の充実、地域性に根差した取り組み、官民挙げての基金創出など様々な特色ある展開が実施されてきた一方で、公共建築の維持・改修・更新に係るコスト負担増、大震災で露呈された施設・リスク管理の脆弱さ、導入から10年以上を経て来た指定管理者制度の課題もあります。急激な人口構成の変化と少子･高齢社会､非正規雇用率4割（厚生労働省「平成26年度就業形態の多様化に関する総合調査」）という数字にも構造的変化が確実に現れ、文化施設にもその大波が押し寄せて来ています。

震災のたびに地域コミュニティと文化の関わりの大切さが再認識されてはいるものの、文化施設は相変わらず従来の発想から抜け出せずにいるようにも感じます。だからこそ、その目標と当面の課題、求められる社会的課題と現実の狭間を見つめ直してみる必要があるのではないでしょうか。従来通りの公演・鑑賞・教育といった領域から一歩踏み込んで活動している運営者・研究者の人たちの話を聞きながら、検討すべき事柄を浮彫りにしたいと考えています。

1. 日　程：　2016年10月29日（土）　14:30～17:30　講演会
　　18:00～19:30　懇親会（下記学内のカフェテリア）
2. 会　場：　日本大学理工学部1号館（東京都千代田区神田駿河台1-8-14）
　　会場URL：　http://www.cst.nihon-u.ac.jp/campus/access.html
　　最寄り駅：　JR「御茶ノ水駅」、地下鉄「御茶ノ水駅」「新御茶ノ水駅」など
3. 参加費（予定）：　一般：　1000円、学生：500円（懇親会別途：3000円程度）
4. 講演会の内容 パネリスト：　高島知佐子（静岡文化芸術大学准教授）
　　水戸雅彦（えずこホール / 仙南芸術文化センター館長）
　　真田弘彦（りゅーとぴあ / 新潟市民芸術文化会館副支配人兼事業企画部長）
　　モデレーター：　新藤浩伸（東京大学准教授）
5. 懇親会　会　場：日本大学理工学部1号館カフェテリア（東京都千代田区神田駿河台1-8-14）
　　参加費：3000円（予定）

高島知佐子さんは、静岡文化芸術大学で片山教授らと共にSUAC芸術経営統計の調査や文化庁補助事業「文化施設・実演芸術団体のためのアートマネジメント実践ゼミナール」を行って来た研究者で、それらの成果を盛り込みながら、公立文化施設の外部環境の変化への適応という視点からお話しいただく予定です。水戸雅彦さんは、アートを通した地域づくり、ひとづくりを目指した住民参加型の文化創造施設（複数の行政体で構成された仙南地域広域行政事務組合の教育委員会による管理運営）を当初から運営、社会的包摂を実践して来た経験から話題を提供してもらいます。真田弘彦さんは、新潟市音楽文化会館やりゅーとぴあでの活動を通じて、市民ミュージカル、演劇、能楽、コンテンポラリー事業の企画・制作から公共文化施設運営まで幅広く務められて、今年は施設改修計画も始まった施設での実践活動を伺うことにしています。そして、それらの話を受けて、公共ホールや博物館などの文化施設、教育・文化政策、文化産業の歴史に通じている新藤浩伸さんが、モデレーターとしてパネルを組み立ててくれます。今後ますます変化する社会環境のなかで、公立文化施設が果たす役割、目指す方向性と現実的課題を参加者のみなさまと共に考える場にします。

幹事：本杉省三、佐藤慎也（日本大学理工学部）

私の文化経済学履歴書

指揮者とオーケストラ：文化経済学の一つの領域

（公財）統計情報研究開発センター客員上席研究員・本学会顧問
松田　芳郎

今では昭和20年8月15日と言っても、何の連想もない日付かもしれない人々が大部分の時代になったのかもしれない。特に1945年以降生まれの若い人達にとってはそうであろう。しかし我々の世代にとっては未だにそうも思えない。1935年生まれの私にとっては、姉達が「もう灯火管制も不要だ」と言って、窓の遮蔽幕を上げて、友達から借りてきた新世界交響曲のレコードをかけていたのが思いだされる。教科書は、算数の教科書に至るまで「軍艦の速度」といった表現に「軍艦」の二文字に墨を塗って、「船」に書き換えて使用する日の始まりの頃である。なにぶん新聞用紙全紙を折り畳んだだけの教科書がやっと新しくできるのはもっと時間がたってからである。

今はなくなったアメリカのLife誌の多彩色刷りがまぶしく目に映ったと言えば多少は理解していただけるであろうか。それから目まぐるしく時代は変わり、私自身も気が付くとすっかり老い込んでしまったので記憶も定かでないところもあるが、生まれ育った北海道の町々は鉄工場のあった室蘭を除いては、ほとんど空襲の被害にもあわず、町のなかのあちこちが空襲に備えて強制疎開された空地はあるものの、主な建物は残っていた。映画館もその一つで、その一つを借りて上演する北海道帝国大学予科生のアマチュア劇団の上演するチエホフの「桜の園」が目新しく、当時の北海道の表現ではまだ内地と呼ばれていた本州から、藤原歌劇団や創立直後の貝谷バレー団が「引っ越し」公演でやって来て、国民学校・新制中学の生徒などは先生に連れていかれて見に行った。後で知るところでは、真偽のほどは知らないが、様々な引っ越し公演があったのは、「北海道は食糧事情が良い」という風評に左右されたのも一因であるとのことである。イギリス映画の天然色映画「赤い靴」などがそれまでの白黒映画に比べて何とも新鮮に見えた。

札幌交響楽団が「札幌市民交響楽団」の名称で発足したのが1961年7月で当初は荒谷正雄（1914-96）が常任指揮者であったが、当時の生意気な学生達は「雑響」と呼んでいたが、その面目が一新したのは、第2代常任指揮者(1969-75)になったオーストリアから来たペーター・シュヴァルツ Peter Schwarz（1925-1998）によるといえる。私がフルブライト留学生として勉強していたマサチュセッツ・ケンブリジのハーヴァード大学での研修を終えて小樽に戻ったのはその直前の1967年であった。1966年からのほぼ1年間は、コロラドのボウルダーでの研修を終えて、新学期《秋学期》にボストンについて最初にしたのは、なけなしの金をはたいて年間34回の土曜の夜のボストン交響楽団（BSO）の定期会員になることであった。その後主席奏者だけで構成する、確か年6回のコンサートとオルガン・コンサート・シリーズも予約したのであるから、何のための奨学金と言われそうであるが、なけなしの奨学金もある意味では有効に活用したと言える。その他、英語で上演するボストン・オペラーカンパニィも通ったし、中国系アメリカ人の友人になった学生の運転するフォルクス・ワーゲンで燃料費を分ける約束でニューヨークに行って、メトでトゥーランドットの上演を見たのも忘れがたい。それよりなにより、ハーヴァードの学生の為にケンブリッジ・シリーズという格安の券で、ハーヴァードの建物の中での演奏会シリーズがBSOのシリーズの中に在ることを知ったり、定期の会に行かれないときに電話一本で連絡すると、その切符の座席を希望者に格安で売って、その分の金額がBSOに寄付される一種の二重販売の制度など、同時に

BSOの経営の維持とマーケット拡大の方策がとられていることを知った。他方学生の方はBSOのホールに通うのは、上着を着てタイをするなど窮屈でまっぴらごめんと言うように言っているのも事実であった。一体サーヴィスの経済学のなかにオーケストラの経営はどの様に位置づけられるのか知りたいと思っていた矢先に経済学者として渡米前から名前を知っていたボーモル（William J. Baumol）とボーエン（William G. Bowen）との共著 *Performing Arts - The Economic Dilemma*（1968）を知った。面白くてむさぼり読んだ。まだ文化経済学などという名前の出来上がる前の時代の一コマである。

とにかく小樽商科大学に戻って、留学した穴埋めに様々な学内の雑務をさせられた。最も時間を使ったのが図書委員としての業務であり、当時図書館長の古瀬大六先生の補佐として図書館の計算機処理、特に目録化と貴重図書の管理システムの構築と、その充実の仕事に従事した。幸い慶応義塾大学の図書館学科の大学院を出た松井幸子さん（後に図書館情報大学教授になり、その後筑波大学併合に伴い筑波大学名誉教授）を助手に採用できたので、指揮者である古瀬先生の構想は大きく広がった。図書館情報学の分野での興味もあったが何より、小さな文系の単科大学で、研究図書館と学生図書館と貴重書図書館の3役を担う小さな図書館で、ハーヴァードならワイドナーとラモントとベイカーの三つの図書館と類似した機能を持たせるとしたら何ができるのであるかということである。できたことは、北海道地域の大学図書館の図書館・情報学関係の欧米語文献の共同目録を作成したことと、シェル文庫・手塚文庫の補充として同窓生の寄付を募って空想社会主義文献の大きなパンフレットのコレクションをイタリアの某研究所から購入したことぐらいであろうか。これはのちにフランス革命コレクションを購入した切っ掛けになったようである。その実現ができたから次は、見違えるようになった札響を招いて小樽で定期コンサートのシリーズができないかと夢想していた矢先に、いわゆる大学紛争の余波で学生運動担当の各種委員をさせられ、そんなことは消えて仕舞った。出来ていたら札幌小樽のつながりも強化され札響の財政にも貢献できたかもしれなかった。そんなことは、小樽商科大学の学生を念頭に置いていたが、なによりもシュヴァルツによる札響の進歩をみて、アメリカ滞在中のBSOがオペラの指揮で名の通っていたラインスドルフ（Erich Leinsdorf,1912-1993）が常任であったが、何度か前の常任のシャルル・ミュンシユ （Charles Münch,1891-1968）の指揮がありフランス曲を奏でる見事さに陶酔したことと、1968年にスイスロマンド交響楽団が来日し、友人に頼んで切符を買ってもらって、上京してアンセルメ（Ernest Alexandre Ansermet, 1883-1969）の指揮した公演と後任のクレッツキ（Paul Kletzki,1900-1973）の指揮の公演を聴き比べて改めてアンセルメのフランス曲の演奏で以前のミュンシュのBSOの演奏を思い出し、同じ交響楽団でも指揮者でこうも相貌を変えるのかと思ったからである。しかし良い指揮者は一朝一夕には生まれないし、そのためには時間だけでなく金もかかるはずである。興味の範囲はどんどん広がっていった。これが私が文化経済学に興味を持ち始めた始まりである。一橋大学経済研究所に転勤してからの旧師の倉林正義先生に再び師事して聴衆者調査にのめり込んだのは、その後の時代の経験である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

松田芳郎先生（(公財）統計情報研究開発センター客員上席研究員で、一橋大学・東京国際大学名誉教授）は、統計界で最高の栄誉とされる「大内賞」を2015年度に受賞されました。授賞理由は「著書、論文等によって、我が国の統計実務の進歩に直接貢献した」です。誠におめでとうございます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私の文化経済学履歴書

活水女子大学 教授
古賀　弥生

文化経済学との出会いは1996年、福岡市で開催された研究大会が契機であったと思う。当時、私は福岡市職員であり、文化行政とは直接的な関連のない部署を転々としていた。

その4年ほど前には、慶應義塾大学文学部のアートマネジメント・アートプロデュース両講座を聴講しに毎週土曜に上京していた。アマチュア劇団に所属して演劇に打ち込み、かつ公務員でもある自分のアイデンティティを生かせる領域として、アートマネジメントをどうしても学びたいという欲求が抑えられなかったのである。そこで学んだことを仲間に伝える勉強会を福岡市役所内で主宰していたものの、学会に所属するなど考えたこともなかった。しかし、当時、文化と社会の関わりに関する学部・学科を持つ大学が九州にはなかったためか、研究大会の開催にあたっては開催地の文化関係者等が連携し力を合わせて受け入れ態勢を整え、これを契機に福岡の文化シーンを活性化しようという機運があった。アートマネジメントの勉強会を続けていた私にも声がかかり、ほんの少しだけお手伝いをしながら大会当日は拙い発表も行った。この機に学会に入会したと記憶している。

その後、勉強会の仲間とともに、福岡を芸術文化が楽しめる街にするための環境整備を考えるフォーラムの開催や提言の作成などを細々と継続していたが、街を変えるような実践には至らず、その限界を超えたくて行政の仕事を辞し、2002年、NPOをたちあげ、ほぼ同時に福岡市近郊の公立文化ホールで事業と広報を担当する職を得た。

NPOアートサポートふくおかは、「誰もが芸術文化を身近に楽しめる環境づくり」をミッションとし、「芸術体験の機会拡大」「学校・施設・地域等と芸術をつなぐ人材養成」等を活動の柱としている。設立当初、わが子2人が小学生であったことから、学校への芸術家派遣事業のコーディネートに最も力を入れ、自分自身がコーディネートの経験を重ねた後は、福岡県内の行政や文化施設が同種の事業を開始する際の制度設計や人材養成に関わってきた。零細NPOの活動であるが、街のニーズの半歩先を捉え、それまでにない動きを喚起する役割を果たせたものと小さな自負を抱いている。

ここ数年は、子ども（学校）から高齢者（介護施設）のQOL向上、そしてホームレス状態の方々の就労支援のために芸術を活用する事業のコーディネートや成果検証に重点を置いた活動へとシフトしている。高齢者については自身の父が認知症となり施設にお世話になった経験からこうした活動の必要性を確信し、ホームレスについては、他のNPOの動きをサポートすることから開始した活動である。学校での活動を含め、いずれも身近に感じる問題点に芸術の力でアプローチできるのではないかとの思いに突き動かされるように進めてきた。その流れが、近年の社会包摂に関わる動向と期せずして重なっていることが感慨深い。

また公立文化ホールでは、公務員時代には適わなかった、芸術文化と市民の接点を創出する仕事に携わることができ、市民の笑顔に接することができる幸せな日々を8年間経験できた。

NPO活動、ホールの業務と並行して2006年には京都橘大学大学院文化政策学研究科博士後期課程を修了、研究活動を実践との両輪で行うこととなった。現在、長崎市にある活水女子大学の専任教員という立場を得て、長崎と福岡を行き来する日々である。芸術体験事業の成果を可視化することを研究のテーマとし、そのささやかな成果が芸術の力で街を、社会を変える実践フィールドのための論拠とすることを目指している。

今年は福岡市での文化経済学会研究大会開催から20年、NPO活動を開始して15年目、大学院を修了して10年になる。振り返ると、文化経済学会とのご縁が「勉強したい」との思いを「街を変えたい」という実践に転換する契機であったようにも思える。その頃には現在の自分の姿など想像もしなかった。もちろん、これから10年後の姿も全く脳裏に浮かばない。しかし、きっと10年後も、身近な課題に怒ったり嘆いたりしながら、その地のアーティストやコーディネーターたちと一緒に走り回っていることだろう。

学会誌「文化経済学」編集委員会より

１．論文の投稿について

「文化経済学」は、年２回発行され、年２回の区切りで投稿論文を受け付けています。

		第 14 巻第 1 号（通巻第 42 号）	第 14 巻第 2 号（通巻第 43 号）
締切	論文エントリー	2016 年 7 月末	2017 年 1 月末
	論文提出	2016 年 9 月末	2017 年 3 月末

＜応募・掲載条件＞

論文の応募（エントリー）は本学会員に限られます。学会費が未納の方は論文のエントリーをすることはできません。掲載には、査読委員の審査を経て掲載が妥当と認められること、掲載料をお支払いいただくことが条件となっています。(2 ページ毎に 6,000 円、ただし、50 部の抜き刷りを配布いたします。なお、金額は今後、改定の可能性もございます)

＜応募方法＞

FAX、email、郵送のいずれかで、下記 7 点を事務局（本誌末の連絡先）までお送り下さい。

①応募日付　②応募者名　③会員番号　④所属　⑤タイトル　⑥論文要旨（400 字程度）　⑦応募者連絡先

＜応募にあたっての留意事項＞

・過去の研究への言及と、従来の研究の流れの中での自己の研究の位置づけ、または独自性が明確になっていること。
・論証や実証に必要な文献・資料の参照が行われていること。
・歴史的事実等については、事実が正確であるかどうかの確認を行っていること。
・応募する論文は未公表のものであること。また、他の学術誌等への投稿の予定がないものに限る。
・英文要旨については必ずネイティブ・チェックを受けること。
・提出先・提出方法・原稿の形式などの詳細は、文化経済学会のウェブサイトを必ず参照のこと。
http://www.jace.gr.jp/bosyu.html

２．学会誌における書評について

学会誌の書評で取り上げて欲しい本がありましたら、メールにて書名をお知らせください（宛先：ktomooka@tcue.ac.jp)。また、書評のための献本をしていただける場合は、友岡邦之編集長まで送付をお願いいたします（宛先：〒 370-0801　高崎市上並榎町 1300　高崎経済大学地域政策学部　友岡邦之宛。なお、事務局宛の献本は受け付けておりませんので、ご注意ください)。その後編集委員会で検討し、取り上げるべき本と判断されれば、評者を選定の上、学会誌に書評を掲載します。

理事会報告

文化経済学会＜日本＞第 12 期第８回理事会

日　時：2016 年 3 月 24 日（土）15:30－17:00
場　所：同志社大学東京オフィス セミナールーム
出席者：河島会長、八木理事長、有馬、伊藤、衛、川井田、川崎、草加、後藤、清水、萩原、藤原、増淵、本杉各理事
委任状提出者（理事）：17 名
欠席者：2 名（監事）

＜第１号議案＞ 会員の入退会について

入会申込者 7 名の入会、退会申込者 2 名の退会が承認された。

＜第２号議案＞ 第 13 期役員選挙の結果について

選挙管理委員の草加理事より、理事・監事選挙のオンライン投票結果が報告された。その報告を受けて、河島会長より、副会長、理事・幹事候補者の指名があり、7 月の新体制発足に向けて就任要請を行うこととなった。

＜第３号議案＞ 2016 年度研究大会（大阪樟蔭女子大学）について

八木理事長と萩原理事より、大会テーマ、大会プログラム、シンポジウムと特別セッションの内容、使用会場、エクスカージョン企画についての報告が行われた。さらに、事務局より分科会の座長、発表者、討論者案の報告があり、協議の結果、一部の分科会座長・討論者の修正を含めて原案が承認された。

＜第４号議案＞ 2016 年度秋の講演会について

本杉理事より、日本大学理工学部 1 号館を会場に、「公立文化施設がめざす目標と実態の狭間」をテーマとする開催案が報告された。協議の結果、10 月 29 日を開催日とし、案にもとづいて開催を進めることとなった。

＜第５号議案＞ 2017 年度研究大会・秋の講演会について

河島会長より、2017 年度研究大会について、大分県立芸術短期大学から招聘があり、7 月 1 日（土）･2 日（日）にホルトホール大分と大分県立美術館をメイン会場に開催する予定との報告があった。さらに、同年度秋の講演会については、引き続き開催地域を検討していくとの報告があった。

＜第６号議案＞ 委員会等報告

（1）学会誌査読システムについて

事務局より、学会誌編集委員会において、2017 年 3 月末発行分よりオンライン査読システムを本格的に導入する予定で作業を進めているとの報告があった。

（2）国際委員会

後藤理事より、本年６月にスペイン・バリャドリードで開催予定の国際文化経済学会ついての参加要請があり、文化観光を特集とする来年度の国際文化経済学会ジャーナルへの投稿案内があった。

（3）ニューズレター

川井田理事より、３月末発行予定のニューズレターのゲラについての督促があった。

＜第７号議案＞ 2015 年度事業報告について

八木理事長より、資料のとおり事業報告がまとまったことが報告された。

＜第８号議案＞ 2016 年度事業計画について

八木理事長より、資料のとおり事業計画がまとまったことが報告された。

＜第９号議案＞ 2016 年度大会優秀発表賞選考委員会委員長について

八木理事長より、今年度から実施される大会優秀発表賞について、対象者を 40 歳以下の学会員で発表フルペーパーの第 1 著者とし、該当者のある分科会座長に対して事前に事務局より連絡があるとの報告があった。さらに規定に基づいて、河島会長より、佐々木亨理事を選考委員長に指名し、選考委員会を設置してもらうとの報告があった。

議題終了後

・理事会制度について

八木理事長より、役員の世代交代を円滑に進めるための理事制度の改革案として、①連続で 6 年となる役員は次回選挙の被選挙権を持たないこと、②会長経験者は理事の被選挙権と理事会の議決権を持たない特別理事に就任することの２つを柱とする改革（案）の報告があり、意見交換が行われた。

入退会情報（敬称略）

◉ 第 12 期第 8 回理事会（2016. 3. 24）にて承認

入会 宮地宏征（横浜市立大学）、小林塁（同志社大学大学院）、米村真悟（同志社大学大学院）、金ボラ（京都大学）、堀本暁洋（東京大学大学院）、森利博（立命館大学大学院）、村上暁子（京都府庁）

退会 2 名

季刊「文化経済学会」 No. 94
2016 年 6 月 1 日発行
ISSN 0918-3787

発　行　文化経済学会＜日本＞
発行人　河島　伸子
編集人　川井田　祥子

〒 170-0002 東京都豊島区巣鴨 1-24-1　第 2 ユニオンビル 4F
（株）ガリレオ　学会業務情報化センター
E-mail：g018jace-mng@ml.gakkai.ne.jp
URL：http://www.jace.gr.jp/
ⓒ 2016,Japan Association for Cultural Economics